

メッセージアウトライン

使徒の働き13:13 「弱い者に働かれる神」

[13] 「パウロの一行は、パポスから船出して、パンフリヤのペルガに渡った。ここでヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰った」

このヨハネとはどういう人物か。彼は12使徒の一人のヨハネではない。ペテロがエルサレムの牢獄から超自然的に脱出できた時、行った所が彼の家であった。→使徒12:12~13 彼の家はエルサレムにあり、女中がいて、かなり裕福であったようである。彼はそこではマルコと呼ばれており、母はマリヤ。その家はかなり大きく、エルサレムのクリスチャンの集まる集会所、教会として用いられていたようである。そして当時起こった大飢饉によって被害を受けたエルサレムの教会へ救援物資を運びに行ったバルナバとパウロはその帰りに、このマルコと呼ばれるヨハネを連れてアンテオケへ帰ってきた。→使徒11:27~30、12:25 ヨハネも伝道の意気に燃えており、パウロたちのように活躍したいという思いがあったのかもしれない。しかし、小アジアへの第1回伝道旅行でバルナバとパウロの助手として同行したヨハネはキプロスからパンフリヤのペルガに渡った時に一行から離れてエルサレムに帰ってしまった。彼は若く、苦勞もあまり知らず、それゆえ伝道の第一線での働きにしり込みして家に帰ってしまったのであろう。

パウロとバルナバによる第2回伝道旅行の開始の時、バルナバはヨハネも連れて行くつもりであったが、パウロはそれに反対し、その結果、バルナバはヨハネを連れて船でキプロスへ渡り、パウロはシラスを選んで陸路で小アジアへ向かった。→使徒15:35~41 実はこのヨハネはバルナバのいとこであり(コサ4:10)、彼を何とか立派に成長させたい。前の失敗を乗り越えさせたいとの思いがあったと考えられる。そもそも、パウロを使徒たちに紹介し、また、郷里へ帰っていた彼をアンテオケの教会の一員としてその交わりに入れたのはこのバルナバであった。→使徒9:26~28、11:25~26 バルナバは人と人との間を取り持ち、慰め励ますという素晴らしい賜物があった。パウロもバルナバの働きがなければ孤立したままであっただろう。この後、バルナバもヨハネも使徒の働きには登場せず、もっぱらパウロの伝道に光が当てられることになる。ヨハネはどうなってしまったのか。生涯を失敗者、臆病者と言われて過ごさなければならなかったのか。しかし、後に書かれたパウロの手紙を見ると驚くべきことがわかる。彼は見事に立ち直り、素晴らしい働きをする人物となっている。

彼はキリストのためには投獄をも恐れない人物となり、パウロと共に働いている。
→コロサイ4:10

パウロは自分の殉教の直前にヨハネのことを、「彼は私の務めのために役に立つからです」と言っている。→Ⅱテモテ4:11

ヨハネ=マルコは変わった。成長し、主のために役に立つ人物となっている。彼は若い時の失敗や臆病を乗り越えた。そして四福音書のうちの一つであるマルコの福音書を書いたのはこのヨハネ=マルコなのである。

その陰にはあのバルナバの働きがあったことは間違いない。しかし、本当の意味で彼を失敗から立ち直らせ、成長させたのは主なる神なのである。

主は彼のような弱く、臆病な者をも強くし、立たせ、福音のためには死や投獄をもいとわない者へと変え、成長させてくださるお方なのである。

私たちも弱く、小さく、しばしば失敗し、大切な務めを前にして、しり込みするような者であるが、このヨハネ＝マルコのように主によって強められ、成長させていただき、失敗を乗り越えて豊かに用いられていく者となっていきたい。

→ローマ 14：4、Ⅱテモテ 1：7